

大井赤亥・大園誠・神子島健・和田悠(編)

## 『戦後思想の再審判』

—丸山眞男から柄谷行人まで—

法律文化社 2015年10月 A5判 292頁 ¥3240(税込)

清原 悠

いま、「戦後」をどのように語るができるか、仮にできたとして、それにどのような意義があるだろうか。2011年3月11日の東日本大震災とそれに続く福島第一原発事故、その後の第二次安倍政権の成立による特定秘密保護法の制定や集団的自衛権の容認など、日本の政治と社会の在り方が根幹から変化を迫られている現在、これほど「戦後」の意味と「思想」の軽重が問われる時代もなからう。

このような時に、「戦後思想」を改めて問い直す論文集『戦後思想の再審判』が少社の人文・社会科学の研究者たちの手により出版された。その副題が「丸山眞男から柄谷行人まで」となっているが、幅広い領域から12名の人物が取り上げられ、各人の思想の展開が紹介されている。具体的には政治学者(丸山眞男、橋川文三、坂本義和、松下圭一)、経済学者(内田義彦)、文学者(竹内好、吉本隆明、石牟礼道子、柄谷行人)、社会学者(見田宗介)、そして市井の運動家(鶴見俊輔、小田実)である。本書ではこれらの「思想家」を「戦後思想の出発点」「戦後思想の相対化」「戦後思想の新展開」「戦後思想の現在」といった4段階に整理のうえ配列し、「戦後思想」とは何であったのか議論されている。評者は本書には次の3点の優れた特徴があると考え。

第一に、各人の思想の特徴とその展開を、彼ら/彼女らが向き合った「戦後社会」あるいは「戦後日本」に即して議論をしている点である。各人の思想の展開を紹介する場合、一般的には学説研究といった形態を取るものと思われるが、アカデミズム内部の理論の発展として読み解くよりも、むしろ彼ら/彼女らが日本社会のどのような部分を対象化し、戦おうと努めたのかの把握に本書では

比重が置かれている。ここでは、その思想がどのような行動様式と結びついたのかという、各人のプラグマティストとしての在り方を捉えることが重要視されている。つまり、「戦後」に対して各人がどのように「審判」を下してきたのかを捉えることが本書の柱となっているのである。例えば、第1章の大園誠による「丸山眞男」論では、「悪さ加減の選択」(福沢諭吉)を重視する丸山の政治学研究(夜店)と、彼の本店としての政治思想史研究の結びつきが論じられており、本書の巻頭論文に相応しいものとなっている。同様に、第3章の大井赤亥による「坂本義和」論や第5章の松井隆志による「鶴見俊輔」論、第10章の神子島健による「小田実」論には「思想」と「行動」を一体に捉えるパースペクティブが特に強くみられる。

上記に述べたような柱が立てられていることは、本書が取り上げる「思想家」の間口を広げることが可能にもしている。これが本書の優れた第二の特徴である。例えば、市井の運動家や存命中の文学者、社会学者をも「思想家」として取り上げることが、アカデミズムの学説研究としては難しいであろう。特に、社会学者が取り上げられている点は、該当の章で直接論じられているわけではないものの、80年代以降の「論壇」と学者の結びつき方の変化を考慮に入れた場合、「戦後思想」の射程を問う上で重要ではないかと評者には思われた。

第三に、大学の授業で使うことができる入門書であると同時に、専門書としての水準が保たれているという点だ。各論文1万5千字程度という短い字数ながら、手際よく各人の人となりや議論の大枠が紹介されている。各思想家の成長の過程を追体験できるような工夫が施された良質な入門書でありながら、先行研究では明らかにされてこなかった論点が提示されてもいる。

そのうえで、本書に対する不満を1つ述べるならば、「戦後思想」の議論が平和・安全保障に関わるものに偏っており、3.11の衝撃が驚くほど薄いという点である。この点を本書への内在的な批判とみるか、外在的な批判とみるかは、「戦後」「思想」の輪郭を問う試金石であると評者は考える。「戦後思想」の再審判は始まったばかりと言える。